

ソ満国境警備とソ連抑留生活丸三年

秋田県 門間 正平

戦後六十年以上経過している現在、忘れたことも多いと思いますが、想起しながらお話し致します。

私は秋田県能代市畠町追分において父浅吉、母スエの兄弟四人の二男として、大正十二（一九二三）年五月三十日に生まれました。兄健市、妹トキエ、同ハルエの六人家族の生活でした。

学歴は能代市停城第三小学校を卒業し、能代停城第一高等小学校に入学、卒業しました、昭和十四（一九三九）年四月秋田県立能代工業学校に入学、昭和十六年三月に卒業しました。同時に藤田組小坂鉦山花岡支山（同和鉦業花岡鉦業所）に入社しました。専門が採鉦のため職歴は鉦内作業が主で、鉦石の採掘から運搬までの現場監督が日常

の作業でした。

昭和十八年徴兵検査を受け甲種合格となりました。そして昭和十九年三月秋田第十七部隊に入隊となりました。秋田第十七部隊では三月から五月までの三カ月間、初年兵教育を受け、六月の初めに下関より九州經由で朝鮮の釜山に上陸して、満州国「すい南」へ（満州とソ連の国境）行き、そこに駐屯している藤重部隊小野中隊に入りました。中隊に入って間もなく幹部候補生の試験があり、受験の結果合格、間もなく幹部候補生としての教育が始まりました。教育中、約一カ月足らずで部隊に動員令が下り、幹部候補生を残して部隊は全員がフィリピンのマニラに移動しました。

その後は幹部候補生の教育を受けないまま第八四八独立守備隊に転属、ここでは部隊の糧秣監視の分遣隊長を命ぜられ、部下三人と共に北支の長城炭鉱中にある中隊の食糧置場の監視に従事しました。食糧は山海関から長城炭鉱まで、約二十キ

口を鉄道輸送されて来ます。その時は陸軍伍長になりました。

長城炭鉱地域は比較的治安の良い所で、炭鉱には数人の日本人が監督をしていました。長城炭鉱の詳細は不明ですが、外部は鉄条網が三重に張られ、三万ボルトの電流が常時通されていてゲリラの侵入を防止しています。食糧監視中にゲリラの攻撃は一度もありませんでしたが、食糧の輸送を行う鉄道は数回の襲撃に遭い、爆破攻撃なども受けていました。その間、数カ月の勤務でありましたが、部隊長命令で復帰し原隊に戻りました。

その後間もなく北支討伐隊に編入され、一週間の中五日間、八路軍の討伐に従事しました。討伐は専ら夜間攻撃で、日中は休んで、夜間行動し、道路をさけて、山越えて二十里から三十五里くらいの歩行が当り前です。そうして夜明け前に攻撃を行い、八路軍が逃げる様子を見るのが毎回の作戦でありました。

このような討伐が数カ月間続き、なんとなく部隊は北支から満州へと移動が始まりました。集結場所は「海城」でしたが、部隊の移動したのは昭和二十年八月初旬で、数日経って八月十五日の正午、天皇陛下のラジオ放送があるとのことで、終戦を聞かされました。これで日本が戦争に負けたとの認識が深まり、軍人としては残念無念でありました。

戦争も終わり、これで日本へ帰国出来ると思っていましたら、ロシア軍のトラック軍団が満州の国境を越え、ぞくぞくと入って来ました。満鉄はロシアの支配下に入り、日本軍の指示では汽車は動かなくなり、部隊もまたロシア軍の命令で、定められた場所に集結させられました。

一番先にやらされたのが武装解除でした。部隊全員が集積場所まで歩き、兵器は一斉に返納をさせられました。この時はじめて、武装解除の意味が分り、また、戦争に負けた実感とみじめさをつ

くづく感じました。

その後、集結場所であらぶらと毎日を過ごし、十一月十日ごろロシア軍の命令でシベリアに抑留されることになり、十一月十日ごろシベリア鉄道で部隊全員軍人、警察官、看護婦等約二千人が有蓋貨車に乗せられ、シベリア北部の町チタに向つて発進しました。輸送途中「満州里」で汽車が急停車したので何事かと思つたら列車内の警察官が飛び降り逃亡したからでした。ロシア軍が追い掛け、逃亡者は約五百人と言われましたが、その中二十人が捕われて、抑留者全員が見る前で、自動短小銃（一度に七十三発発射出来る）が一斉に発射され、一瞬にして全員が銃殺されました。お前達も逃げるとこの通りだよとの戒めであった訳です。その後何事もなく列車はソ連領内に入り、チタに到着しました。

抑留者全員が下車すると思いましたが五百人だけが下車、あとの千人はそのまま他方面に発進し

ました。

十一月中旬には気温は零下一五度ぐらい、現地に着はしたけれど宿舍はなく、天幕での日常生活がしばらく続き、食糧も腹八分目と言うが実際は腹四分で、生きて行くのが精いっぱい、この先どうなるか心配でありました。

数日経ちますと抑留者の入居する宿舍の構築が全員で進められました。その構築方法は地下に穴を掘って、穴の中に建物を建てる方法で、素人も出来る簡単な方法です。作業の分担は穴掘り作業、木材の伐採作業の二つで作業が開始されました。

自分は地下の掘方作業に回されました。地下は永久凍土で凍結しており「つるはし」でもとても掘れず、発破で掘り施工するなど、なかなか簡単には行かぬ状態でした。それに寒波が重なり、マインス二四、五度もあり、思ったように作業は進めることが出来ませんでした。

毎日毎日の作業は苦闘の連続で、五、六カ月でようやく宿舎が完成し、翌年の四月ごろすなわち昭和二十一年四月に幕舎生活から新しく建てた宿舎に移動、入居しました。

するといよいよ抑留者の本作業に取り掛かることとなりました。今まで何の職業をして来たか、各人の過去の職業についてロシア軍担当者に聞かれました。しかしお互いに技術者であったことは口を合わせて伏せ、ただ農業の従事者ということを押しました。これはうまい具合に行き、作業は建築現場の手伝いやら伐採作業、炭鉱の坑内積み込み作業の三種類でありました。

最初に就いた作業は炭鉱でのベルトコンベアの積み込み作業で、冬期間はほとんど炭坑作業でした。ロシアの現場監督はコンベアに石炭が積み込まれているかどうかと貯炭場を常に監視しているので、少しでも「サボ」るとすぐに分かり、積み込み現場に監督がやって来て、気合を掛けられま

す。言う事をきかないと、引率の監視兵が来て、ものも言わずに銃でなぐります。

食べ物については、体が良く大きな人と、弱々しく体の小さい人との食料は同一です。小さい人は食物に不足や不満は無いようですが、大きな人ほど食料不足で痩せ衰えてゆきます。もつともつと食わせなければ働くことも出来ないと言うと「お前は生意気だ、営倉に入れる」と言われます。

そこで「入っても良い」と答えたら呆れた顔でその場を去って行きました。監視兵に目をつけられたためか作業が終了すると、各人暖房用の石炭を背負わされる羽目になり、これが毎日の作業に加わりました。

あの寒い冬期が終わり五月になると作業内容が変わって町の建築現場の手伝い作業に回りました。そこでは町民と話を交すことが出来るようになり、近くの民家に寄って「空腹でどうにもならない、食べものを分けて下さい」と言うとすぐに馬鈴薯

を持って来てくれました。これも一人ならともかく、数人で参りますと断られます。町に作業に行く度に、一人で民家に行き、ロシア人の世話になりました。また秋の収穫期になりますと、ロシア人の管理の畑に気づかれぬように潜伏し、馬鈴薯を掘り起こし持ち帰ったこともありました。

収穫時期には掘り出した馬鈴薯をトラックに積み込む運搬作業もあります。全部が国営農場での作業で、個人のものではありません。トラックの運転手も日本人のやることを見て見ぬふりをしています。トラックに積み込む前にズボンの裾とか、外套の裾を縛って袋状にして、この中に入れると十キロぐらい入ります。

そうして積み込み、運搬作業が終わり、いざトラックに乗車の際には体につけた馬鈴薯の重みでトラックが上がれません。見かねたロシア人が尻を押してくれ、ようやく荷台上がる始末でした。このように毎日が食料不足であり、食べるための

戦いでした。頭の中にそれ以外は何もなかったのです。

持ち帰った馬鈴薯は寝台の枕の下に隠して置き、それがあの中は必要量を飯盒で煮て食べ、あるいは潰して焼いて食べたりしました。またある時は監視兵の目を逃れて作業のすきを見てバザールに行き、品物を眺めたりしていますと、ロシア軍の将校が来て「お前は どうしてここに来たのか」と聞かれましたので「煙草が欲しくて来ました」と言うと、買ってやるからすぐ帰れ、と言われて帰ったこともありました。将校に見付かった時は倉入りを覚悟しましたがとがめられることもなく、中には親切な将校もいたのだなあと感心しました。抑留生活も丸二年が過ぎ三年目に入った時に身体検査があり、軍医から栄養失調と診断を受け、別のラーゲルに移動となりました。目標は毎日一回、弱者のみで山に行き、薪を採って来るのが仕事でした。炊事班ではこの薪で炊事をしており

ました。

ある時のこと、炊事班に行く、同郷出身の泉栄さんが炊事班長をしておりました。泉さんとここで会うとは地獄に仏「腹が減るでしょう。いつでも良いパンをやるから来なさい」と言われ、遠慮なく泉さんの所にゆきパンをもらいました。今年が経過して三年目、日本に帰ることになりナホトカ港に集結しました。

昭和二十三年七月ころで、すぐには帰れず、帰船したのは八月半ばになったと思っております。骨と皮ばかりの状態で三日かかって東舞鶴に上陸し、四年振りに日本人を見て嬉しく懐かしく感じました。そこには一週間おかれ、秋田に帰ることとなりました。東舞鶴を出発し、列車から途中の景色を眺めつつ秋田に來ました。ここでつくづく日本に帰れて良かったと涙が出るほど嬉しかったものです。

秋田に到着すると妹二人で迎えに来てくれ、元気で四年振りの再会を果たすことが出来、懐かしく、また嬉しかった。早速病弱で体の弱っていた母のことを聞くと二人共何とも言わなかったのですが、もしかして死んだのだとは思ったのですが、それ以上に聞きませんでした。

約二時間で能代駅に到着、駅から徒歩十分程度で我が家に着きました。やはり母親の姿は見えず、二人の妹は私が力を落さぬように母のことは内緒にしていたとのことでした。そして母の死は自分の前途に暗いものを感じました。それでも父親は能代高等女学校の用務員で妹二人は機械工場の事務と郵便局の交換手で、ようやく家族四人の生活となりました。兄健市は復員後分家しました。

二週間ぐらいは自身の体力を鍛えて、前職の花岡鉱山総務課に帰国報告をし、再就職のお願いに行つたところ、門間君は死亡したことになるので除籍になっている。今しばらく家で待機をと言

われました。大変落胆しましたが、しかし待つしか方法はありませんでした。

そのころ、近くの茶屋さんからトラック一台分の薪を切ってくれないかと依頼を受けました。八月後半の暑い盛りの中、朝四時半に起床し、二週間ぐらいでトラック一台分の薪切りを終えました。その謝礼としてもらった五円は余りにも小額のため二度とこのような仕事は止めました。

やはり花岡鉱山に再就職する以外はないと担当者を訪ねますと、運良く明日から出社しなさいの返事に喜びました。帰宅後、働く準備に取り掛かり、早速翌日現場に向いました。先輩、後輩に挨拶回りをして、皆さんからも喜んでもらえ、大変嬉しく有り難く思いました。こうして私の第二の人生が始まりました。

翌昭和二十四年九月、金は無く着の身着のままの生活でありましたが、財産家の娘さんと結ばれることが出来ました。人生に良き伴侶を得ること

が出来ましたが、結婚するにも当時は背広を買うにも布地なく困っていますと、職場の友人の洋服店の息子さんを紹介され、どうにか結婚の段取りも出来た九月二十日、両親の親、兄、妹だけの小人数で挙式しました。今思うと最低の結婚式であったと思っております。物も無い、お金も無い、これが昭和二十四年のことでした。

翌年十二月に長男誕生、また昭和二十七年八月には長女が誕生して四人の生活となりました。子供が生れた時、夫婦で相談して二人を歯医者や技工士にすることに決めておりました。そのためにはお金を貯めることが先決ですので、月謝など費用を聞いて見ますと、とても出来る話ではありません、給料暮しの方にはちよつと無理なほどのお金が掛かりますと教えられました。それでも、その目標に向って計画的に進め、自分の給料でやって行ける見通しを立てました。

私達夫婦は貯金に専念し、何のために生きてい

るのかと考えさせられることもしばしばありまし

とも、皆様方の力添えの結果と感謝しております。

たが、予定どおり貯金も出来、長男が日本歯科大学に合格、卒業後、医師国家試験にも合格し、私達の目的を達成することが出来ました。そして横浜の開業医に勤務後、大館市立病院に就職しましたが昭和五十四年、門間歯科医院を開業し現在に至っております。また長女も仙台の技工士学校を卒業し、花岡鉦山病院歯科医院に勤めました。

私は昭和五十四年同和鉦業花岡鉦山を三十四年間勤務して退職しました。退職後は長男の歯科医院の事務を平成十三年まで手伝っていました。昭和五十六年一緒に努力してくれた妻が病死、ようやく先に明りと楽しみが見えた時でしたので残念でなりませんでした。その後長男夫婦のことを考え五十九年に再婚しました。

抑留を生き延び、人生をより良く全うするため目標を定め、その実現に力いっぱい努力した甲斐あって、今日の幸せを得ることが出来ましたこ